

小兒しょうに

蘇軾

熙寧八年（一〇七五）四十歳、密州在任時の作

1 小兒不識愁

小兒しょうには愁うれいを識しらず

2 起坐牽我衣

起坐きざして我が衣ひを牽ひく

3 我欲嗔小兒

我われ 小兒しょうにを嗔いからんと欲ほす

4 老妻勸兒痴

老妻らうさいは兒この痴ちを勤すすむ

5 兒痴君更甚

「兒この痴ちは君きみ 更さらに甚はなはだし

6 不樂愁何為

樂たのしみしまらずして愁うれいうるは何なんす為なれぞ」

7 還坐愧此言

坐まに還かえりて此この言げんに愧はづ

8 洗盞當我前

盞さかずきを洗あって我が前まへに当あつ

9 大勝劉伶婦

大おほいに勝まされり劉伶りゆうれいが婦ふの

10 區區為酒錢

區く々くとして酒錢しゆせんの為ためにするに

【語意】○小兒：三男の過。熙寧五年生まれ、この年、かぞえどしで四歳になつてゐる。○牽我衣：〈潁州初別子由二首〉には弟轍の子どもたちについて「始め我の宛邱に来るや、衣を牽いて兒童は舞へり」○嗔：声のほげしいさま。また瞋に通じ目をいからすさま。○老妻：継室の王氏はこの年、二十八歳。老くはしたしみをこめた気持ち。○洗盞：杜甫の「嚴中丞が青城山の道士の乳酒一瓶を送りしを謝す」の詩に「盞を洗ひ開き嘗めて馬軍に対す」（集卷十一）盞は小さなさかずき。○当：面とむきあうのが当、ここはまんまに置く。○劉伶：竹林七賢のひとり。酒徳頌一篇を著わす。大の酒好き。妻が酒を捨て酒器を毀ち、禁酒をすすめると、自分からはとてもやめられないから鬼神に誓いをたてようといつて、妻に酒肉をそろえさせ、「天は劉伶を生みたまい、酒で名を成させてくださった。一飲に一斛。五斗を飲んで悪酔いを解きます。婦人の言など大きくわけにはまいりません」といい、酒肉をたいらげて酔っぱらってしまった。（晋書の劉伶伝。また蒙求にもみえる）。○区区：いつくしむ心。ここは、けちけちすることか。

【解釈】赤ん坊は大人の世界の愁いなど、まったく知らないものとみえ、ちよこんと坐つて、さかんにわたしの着物をひっぱる。わたしが坊やのおいたをしかろうとすると、妻はかえつて坊やに、もっとおいたをしてあげなさい、とけしかける。そして、いう。「子どもみたいなおばかさんかげんときは、あなたのほうがこの子よりわをかけてますよ。それに、いつもいっこう楽しそうにはなさらず、しかめっつらばかりなさつてるのはどうしてなの？」

妻のこのことばに恥じて、すでに坐を起ちかけていたわたくしは、また坐にもどつた。すると妻は、盞を洗つて来て、まあ一杯めしあがれとわたしのまえにすえる。むかし、劉伶の妻が大酒飲みの亭主をもち、酒代がかさむのをけちけちしたのなんかより、よっぽどましだ。